

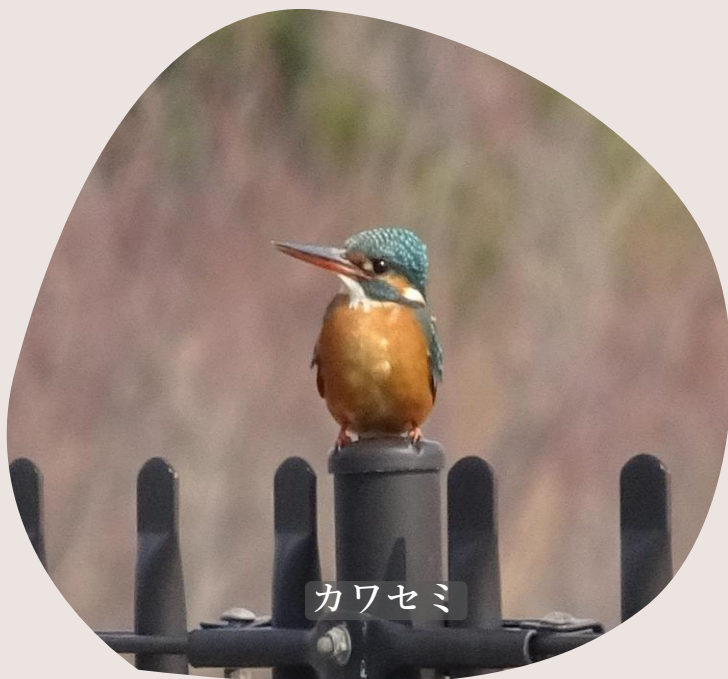
堺市の生物多様性にふれる冊子

# 堺いさものの通信



2025 冬 号





カワセミ



ムラサキシジミ



ニホンスイセン



ルリビタキ

# 堺にすむ いきものたち



ジョウレンハウオウゴケ

**生物多様性**とは、単に動物や植物の種類が多いということだけを意味するものではありません。地球上では、様々な環境の中で多様な生き物が食べる・食べられる・共生するなど、お互いにつながりをもって生きています。このように、多様な生き物がお互いにつながりをもって生きていることを生物多様性といいます。

ここでご紹介する写真は、すべて堺市内で撮影された写真です。WEBサイト「堺いきもの情報館」に市民の方などからご投稿いただきました。個性豊かな生き物たちや彼らのすみかを見て・知って、生物多様性を感じてみてください。生物多様性とは身近なものなんですよ！



ウスイロシマゲンゴロウ



タヌキ



ヘラサギ



ホトケノザ



コウノトリ



いき

もっと もの知りになれる！

# 生物多様性のおはなし

- 人と自然のバランスを探して -

科学技術の発展は、私たちの暮らしに多大な恩恵をもたらしてきました。農業の導入はその代表例であり、食料生産の効率化と安定供給に寄与しています。しかし、その利便性の裏には、自然環境との関係性が希薄化するという課題も潜んでいるのです。

20世紀半ば、アメリカや日本で広く使用された農薬DDTは、当初は画期的な害虫駆除剤として歓迎されました。ところが、後にその環境への影響が明らかになります。DDTは生態系内で生物濃縮され、猛禽類の体内に蓄積。その結果、卵の殻が異常に薄くなり、孵化率が著しく低下しました。ハヤブサやワシなどの個体数は急減し、自然界のバランスが大きく揺らいだのです。日本でもかつて広く使用されていましたが、1970年代以降、環境保全の観点から使用が禁止されました。

こうした人間活動による自然への影響は、現在も形を変えて続いています。近年、全国でクマによる人身事故が多発している背景には、山林の荒廃、里山管理の停滞、気候変動による餌資源の減少、そして人口減少・高齢化による人の山離れなど、複合的な要因が存在します。かつて人と野生動物の間に存在していた「緩衝地帯」が失われ、クマが人里に出没する事例が増加。人間の生活圏と野生動物の生息域の境界が曖昧になり、両者の距離感が著しく変化しています。

人と自然の調和は、技術だけでは維持できません。私たち一人ひとりの理解と行動が、そのバランスを保つ鍵を握っているのです。



＜編集・発行＞

堺市環境局 環境保全部 環境共生課

TEL：072-228-7440 / FAX：072-228-7317

E-mail：kankyo@city.sakai.lg.jp



WEBサイト  
トップページ

ユーザーネーム  
sakai\_ikimono



Instagram  
アカウント